

巻頭言

日比野克彦（熊本市現代美術館館長）

■ 開館20周年に向けて

ART LAB MARKET（アトラボマーケット／コミュニケーションスペース&ショップ）

熊本市現代美術館は街なかの、ホテルや商業施設などが入っているビルの3階に入口があるのですが、これまでは、入ってすぐにミュージアムショップがあり、その奥にライブラリー（ホームギャラリー）と展示室があるという造りでした。そこで、街なかと美術館を繋ぐことができ、商業施設と文化施設の中間的な役割を持つART LAB MARKET（以下、ALM）を入口につくろうと考えました。

そのためには、建築的な内装と同時に、ミュージアムショップを運営しているアートプリントジャパン（以下、APJ）の協力も必要でした。本社の会長や社長にもお会いし、店長と何度も話し合い、一緒に新しい形態の運営を目指しましょうと意気投合することができました。ミュージアムショップに隣接する休業中のカフェスペースの再利用も考え、まちと展示をつなぐALMを開館20周年である10月12日にリニューアルオープンしました。

今、ALMではワークショップはもちろん、市職員とプレスト（ご用聞き）したり、Web3やまちづくりなど様々なことについて市民の皆さんと意見を交わしたり、美術館スタッフの研修をしたり。ずいぶんと美術館の入口の雰囲気も変わったと思います。今後さらにALMを活性化させていきたい。スタッフの数や予算的なことなど、色々課題もありますが、これからどう展開させていくか、楽しみにしていただければと思っています。

クラウドファンディング

ALMのリニューアルにあたっては、美術館スタッフにクラウドファンディングをやってみてはと勧めました。20周年を機に、リノベーションをするためには予算が充分ではなかったことありますが.....それ以上に、その後の「市民とともに」という意識の広がりや、美術館を応援してくれる人たちとともにつくっていこうという共創の呼びかけをするためにも良い機会になると思いました。

ただし、クラウドファンディングは、呼びかけの中心になってやる人が大変です。最初から最後まで、しっかりしたフォローがないと達成しない。スタッフの声掛けやフォローがあったからこそ実現できたと思います。また、それ以上に熊本の土壌として、文化・美術館への愛情や期待

値があったからこそ、目標金額を大きく上回ることができたのだと思います。

今回のクラウドファンディングで多くの支援者と直接つながったことで、美術館はお金に換えられない宝を間違いなく得ることができたのではないかな、と思っています。

■ 昨年度の展覧会について

和田誠展

和田さんは、とにかく作品の量が半端じゃない。同じ作家として、アーカイブのしかた、特に作品まわりの資料の整理のしかたはとても参考になりました。また、和田さんの母校でもある多摩美術大学が作品を保管しアーカイブしてくれているというのは、作家にとってはとても幸せなことだと感じました。

美術館では「資料」というものに価値がつけにくく、どうしても作品よりもランクが下に見られます。そういう意味では、資料の扱いは図書館のほうがふさわしいとも言えます。しかし、美術作品をより深く理解したり、調査したりするには周辺資料がとても重要であるという認識は、美術館でも増してきています。和田さんとは話がそれますが、アートプロジェクトのような「物」ではなく「出来事」などの作品に対しては、まさに関連資料こそがその作品を知る上で大切になってくるのです。美術館もこれからは物である作品だけでなく、オーラルヒストリーやデータなどの資料の収集の方向性や保管の方法など、将来的なビジョンについて話し合うことが必要かもしれません。

手描きにこだわる和田さんの作風は、人情味あふれる人間的なものであり、彼の人間関係などが伝わってきます。和田さんにとって、日常の中のたわいもないことがとても大事だったことがわかります。そんな感じにさせてくれるのも、周辺の資料全体があったからこそだと思います。

不思議の森に棲む服 ひびのこづえ×KUMAMOTO 展

ひびのこづえは舞台や広告の衣装のデザイン、プランニングを担当するコスチュームアーティストであるだけでなく、ここ数年は、衣装から発想するパフォーマンスをプロデュースし、ダンサー、音楽家との共同作品を発表しています。衣装の展覧会ではなく、パフォーマンスを美術館で公演するという挑戦は現代美術館ならではのものだと思います。

パフォーマンスという類のものを、展示を前提として造られている美術館でどう見せていくかについてはさまざまなチャレンジが必要です。ひびのこづえの展覧会での映像は、パフォーマンスのアーカイブであって映像作品ではありません。しかし展示室で行った公演は、展示されている衣装をダンサーが纏っていくという、劇場と美術館の二つの機能を合わせた挑戦であり、劇場では感じられない新鮮な表現であったと思います。

PAPER：かみと現代美術

紙という身近な素材をテーマとした展覧会は多くありますが、この展覧会は単なるクラフト展ではなく、素材から製品まで、幅広く変容する紙そのものの特性に注目した展覧会でした。紙とは何かという問いかけが随所で観られ、紙というものが人間にとって欠かせない素材であるという深みのある展覧会となっていました。

作家にとって、紙とは自身のイメージを視覚化するために最も使用することの多い素材です。その中から、紙の素朴さ、国による紙の文化の差異、紙の柔軟性、紙の繊細さ、紙の社会性、紙の強さなどに特化した作家、作品を選定し、紙という素材が、扱い方によって様々な表現になることを実感できる展覧会でした。また、紙を主役にしてみれば、紙・PAPERの持つ許容力に大きな可能性を感じる展覧会でもありました。

第34回熊本市民美術展熊本アートパレード

実は、熊本市現代美術館が開館してはじめてのアートパレードの審査員を務めたので、今回、20年ぶりの審査となりました。審査にあたっては、テキストを読んだ上での世界感も大事にしました。作品を観るとき、インスピレーションや第一印象はとても大事です。でも、第一印象だけでは通り過ぎてしまうけれども、テキストを読むと惹き付けられる種類の作品もあります。

アートパレードは、アンデパンダン展で、全ての作品を展示します。出品者にとってもハレの舞台です。制作者の作品をつくる思いの背景が伝わるような展覧会の見せ方や楽しませ方などについて、これからもう少し工夫してみてもいいかもしれません。完成した「もの」だけではわからない人柄やコンセプトを、観る人にどう伝えるかを考えてみたいな、と思いました。

坂口恭平日記

展示室の中に坂口さんのアトリエがありましたが、それは制作の場というよりも、坂口さんが他者と過ごし、語り合う場のようなものでした。私も何度か彼が会場にいる現場を見ましたが、その、作家と観客が対峙している空気感は、普段の美術館では味わえないものでした。

作家が作品を描く理由も坂口さんの場合は独特でした。会場で作品について聞いたとき、これらの作品は何か感動して描いているわけではなく、記憶を留めたいというわけでもない。描くことによって時間と向き合うことができる、というニュアンスで話してくれました。

大量の作品群の中でも、私は紙象嵌の作品がいたく気に入り、会場に行くたびに、その作品の前で立ち止まり時間を過ごしました。作品とはなぜだか好き嫌いがありません。嫌いな作品は理由が簡単に見つかりますが、好きな作品の理由は作品を見続けていてもなかなか見つかりません。好きというものはそういうものなのだと思います。

この展覧会には私のように作品が好きになり、購入してコレクターになっている個人蔵の作品も多く展示してありました。これは坂口さんに親しみを持つ多くの人々によって作り上げられた展覧会とも言えます。また、その多くの人々の気持ちを代表して、坂口さんの展覧会を見てみ

たいという素直な想いをもち続けた担当学芸員と作家との信頼関係も、この展覧会において重要であったと考えます。

【 熊本におけるアートコミュニケーションとは

アートコミュニケーター

アートにはひとつの答えはありません。人が違えば見方が変わり、私の正解はあなたの正解とは限りません。

館長として熊本に来た時、互いの違いを否定しないというアートの特性が機能していく文化を、美術館から熊本のまちに広げていきたい。そのためにアートコミュニケーター（アートを介して人々のコミュニケーションを促す人材、以下AC）を育てるプログラムを始めようと思っていました。でも、他の街（東京、取手、岐阜など）でやっているような、美術館寄りのACの養成講座は、熊本にはなんだかしっくりこないような気がしました。

スタッフと話すなかで、熊本は、既にまちの中にACが居るのではないかと.....という話になりました。実際に私が2007年に熊本市現代美術館で開催した「HIGO BY HIBINO」という展覧会でも、街の方々と作品制作を行って行く際に、アートで街を繋いでくれるAC的な人材と数多く出会いました。熊本においては、そんな彼らのような人材を発掘し、市民同士が繋がることで、美術館的な機能をまちに広げていけるのではないかと考えるようになりました。

ご用聞き

2021年の秋頃から、熊本市役所の様々な部署の課題や困りごとを聴きに伺うようになりました。これは、まちの情報や市民の課題が一番集まっているのが市役所だと考えたからです。これまでに数十件の「ご用聞き」を行ってきましたが、続けていく中で、市職員の中にACとしての素養が育ちつつあるような気がしています。

市職員はこれまでも、日々、様々な役割を持ってまちに出かけていました。これから、美術館館長のご用聞きを通じてACとしての意識を持った市職員がまちに出るようになれば、アートマインドがまちにも、市民の心にも広がって、アートが社会の中で緩やかに機能していくようになるのではないかと期待しています。

【 これからに向けて

市政の中枢に文化行政を置くという熊本市の方針を実現するために、2023年度から新たに市の文化顧問にも就任することになりました。文化顧問の役割のひとつは、ご用聞きで出会う市職員、地元の大学関係者、市民などが互いに美術館・アートを媒体として繋がり、一つの答え

では成立しない社会にコミットしていくことにより、多様性を尊重しあえる市民の文化を育むこと。

今後、ますます熊本市と現代美術館が共創していけるように美術館館長として文化顧問として活動していきたいと考えています。